

【 論文 】

井上円了は忘却術をどのように編み出したのか？ ——ヘルバルト心理学の受容を中心として——

甘露純規

はじめに

井上円了の『失念術講義』は物珍しさから様々な人々の興味を引いてきた。が、学術的な方面で本格的に取り上げられたことはほとんどなかったと言っていい。恩田彰は『活用自在 新記憶術』に関する解説¹の中で『失念術講義』を心理療法の原理を展開したものと簡単に紹介している。また野村英登は「井上円了における催眠術と瞑想法」²において催眠術と瞑想法の関連から『失念術講義』にふれている。先行研究と言えこれぐらいしかない。しかし、これらの先行研究は円了の『失念術講義』の成立を明らかにするものではない。本稿の目的は、その成立を明らかにすることにある。あらかじめ結論を述べておけば、円了は、江戸時代・イギリスの心理学・ドイツの心理学、それぞれの忘却についての考えをあたかも一つの縄を編むように接合して、その忘却術を作り出した。

円了の忘却術は先行研究が示すように、心理療法や催眠術等、様々な問題が関係しており非常に複雑である。筆者はかつて円了の心の理解に「易経」が大きく影響していること、イギリスの心理学が円了の忘却術に影響を与えた可能性があることを指摘した³。しかし円了の忘却術の成立過程の解明に迫るのであれば、重要なのはドイツのヘルバルト (Johann Friedrich Herbart) 心理学との関わりを明らかにすることである。本稿の重点はこの点にある。

適宜円了が学んだ心理学の原書を参照するが、翻訳書がある場合はそちらを見ること

にしたい。理由は二つある。一つは筆者の限られた能力の問題による。関係する文献は日・英・独・デンマーク語のものとなるが、全てを扱うのは筆者の手に余る。今回は日・英の文献に限ることにした。二つ目は翻訳の時代的役割にかかわる。これらの原書は翻訳されることで、心理学的な知識を広く普及させた。この普及が円了の思索・著述活動を容易にし、人々が円了の忘却術を理解する上でも大いに役立ったであろうことは間違いないと思われる。

1. 江戸時代の記憶・忘却観

江戸時代の記憶・忘却観について簡単に見ておこう。江戸時代、人々は東洋医学や朱子学等の影響から、精神活動を行う主体は脳ではなく、血や気を通して全身を循環する心にあると考えていた。朱子学では、人間の心身はどちらも天地万物を構成する根源的な物質兼エネルギーである気から成り立ち、気は陰と陽の性質に分かれる。同じ半虚半実の陰・陽の気で構成されているという点で天地と人間の心身は通じ合っている。こうした陰陽の気は天地を間断なく周流する⁴。

人間の心は、父母の精が結ばれてできた「神」と、靈魂ともいえる「魂」・「魄」、いわゆるものを考える活動を行う「意」、「意」を対象に向かわせる「志」、以上五つの流体から構成される流動体だと考えられていた。靈魂的な性格の強い魂・魄には身体の内と外を往来する浮動性があるとされる⁵。知的活動について言えば、朱子学においては、記憶は魂・魄のうち魄の働きの一つであり、外からの情報を心の内側に受容するという意味で、魄に宿る陰の気の働きによるものと考えられていた。その一方、思考は能動的な性格を持つという意味で魂に宿る陽の気の働きによると考えられていた。一見すると単純な二分法にも見える。が、陰と陽の中にもそれぞれにまた陰陽があり、記憶については出発点となる記銘は受動的であり陰だが、想起は積極的であり、魂－陽が関わるとされた⁶。

忘却について言えば、流動的な心が身体の一部に偏って存在している場合、心が内在する気も偏り他への注意がおろそかになる（呼ばれても気づかない等）。執着する対象が多く、気があちこちに偏って存在するようになると、心が元に戻れなくなる事態を招く⁷。この事態が元にあった事物の忘却、現在の意識からその事物の認識の消失を招く。つまり忘却とは、流動性のある心が偏在・散在する時に起こりうる認識の消失であり、心の本来の働き（朱子学で言えば、記憶力を主に支える陰の力）の衰弱の現れと理解された。こうし

た忘却の克服には薬の服用や静坐を通して乱れた心の流れを回復し、心本来の働きを取り戻すことが勧められた⁸。

否定的に捉えられる一方で、心の流動性に起因する忘却は積極的な営みと見なされることもあった。例えば道教では、坐忘法という瞑想法が勧められていた。方法としては、心を丹田に集中させることにより心を外界から遮断する。そして、仁義や礼楽といった儒教的・世俗的価値から心を解放し、大道に同化することを目指す。言わば宗教上の「忘却術」であった⁹。このような宗教上の忘却術は、その実践者の意識から世俗的価値等の観念を消しただろう。が、その術の本来の目的はそうした観念への執着から心を自由にするものであり、意識から観念が消失している状態(=忘却)は本来の目的からすれば副次的なものでしかない。

以上が江戸時代の記憶・忘却観についての粗描である。幕末期に生まれた円了にとって、東洋医学や朱子学に由来するこのような記憶・忘却観は身近なものであったに違いない。よく知られているように、円了は石黒忠憲や旧長岡藩崇徳館の都講であった木村鈍叟から系統的に漢学を学んだ。それだけではなく、円了は東京大学進学後も「荀子」等の漢籍の研究を独自に続けたのである¹⁰。

もちろん、開化期に近代的な教育も受けた円了が、江戸時代そのままに心が身体の内外を浮遊すると考えていた——というわけではない。しかし円了はこのような江戸時代の記憶・忘却観を、欧米の哲学や心理学等から得た知識を使い、再解釈することで継承している。明治18年の「易ヲ論ズ」から明治31年の『破唯物論』にかけて、円了は繰り返し「易経」の太極-陰陽観を取り上げて論じている。「易経」では、太極とは物質と精神、すべてが未分化で混沌とした原初の状態を指す。この太極から陰陽の気が分化し、これらの気があいまって世界のあらゆる現象や事物を構成する。円了はこのような太極-陰陽観を、ヘーゲルの理想論やスペンサーの社会進化論等と突き合わせて、宇宙が誕生する以前の精神と物質の区別も未だ無い状態を太極になぞらえ、その太極から分かれ出るパッシヴ-引力を陰、アクティヴ-反発力を陽と整理している。円了は、この陰と陽の力は対立し互いを抑制し合う関係にありながら、陽が極まれば陰を生ずるように(逆もまた然り)、相互に往還する関係にもあり、精神界と物質界のあらゆる現象を支配すると考えた。物質には宇宙誕生以前の太極から分有された陰陽の力が潜在しており、人間の心の働きとは、脳-神経細胞中の生化学的な働きを通して、潜在していた陰陽の気が発現したものと理解される。更に円了は理性と感覚をそれぞれ陽的なもの(無限の進化を進める拡張力)と陰的なもの(そのような進化に対する抵抗力)として捉えている。このように陰陽の存在が措定されて

いる点で、円了が考える心には運動体としての性格が担保されている¹¹。

このような円了の心の理解において、忘却にはどのような位置が与えられていたのだろうか？大正6年5月に出版された『奮闘哲学』で、円了はかつての自著の意義に言及している。『失念術講義』を発表してから、すでに20年以上経過している。自著に対する円了のこだわりがうかがえよう。

運命はすべて前世の宿因にして、この世界には一として因果の理法によらざるものなしというときは、人の意志作用もみな必然にして、因果の理法に従うものとなる。しかるときは意志の自由は全くなきことになるとの疑問が起こるに相違ない。この点は、余は相含説をもって説明している。すでに宇宙の真理は相含である以上は、必然のうちにおのずから自由あり。自由のうちにおのずから必然ありて、意志は必然なると同時に自由である。物質は因果の規則によりて支配せられ、一変一動としてその規則によらざるはなく、絶対的に必然というも、もし分子元素に至らば、必ずその中心に他を引くとか、あるいは他を拒むとかいう作用を備えている。これすなわち物質の自由動作というべきものであろう。物質の必然中ですらも、自由動作ある以上は、吾人の精神の中心に自由意志あるべきはむろんのことである。〔中略〕すでに生死の運命の起こるゆえんを知らば、これにつきて迷信を起こし、苦悶をなすがごときは、愚の極である。〔中略〕近頃静座法が盛んに行わるるが、すべて身体を健全にするだけの目的で、生死を脱却するの修養でないのはすこぶる遺憾に思う。よって今より後は生死の迷いを離れるところの静座法を実行してもらいたい、また近頃凝念法を教うる学校ありと聞くも、凝念法よりも散念法を勧めてもらいたいと思う。今日の青年は凝念に過ぎて病的に陥るから、むしろ散念法によりて、一切の念慮を放散するようにせなければならぬ。余の唱道せし失念術のごときはすなわちその一法である¹²。(2:266-268)

もはや陰陽という言葉を使って語られることはない。が、基本的な論理の枠組みは変わっていない。人間の運命から分子元素に至るまで、その自由動作を生み出す反発力は陽、必然性を生み出すところの引力は陰と考えて良い。引用後半の凝念と散念も、それぞれ陰と陽に当てはめて考えることができよう。円了は自らの『失念術講義』における忘却を散一陽の力として考えていたと言えるだろう。引用の前半の自由(陽)と必然(陰)の相含説に目を向ければ、心が常に散念＝忘却にとどまり続けることはあり得ない。その心はやがて自然に凝念に向かっていくことになるだろう。

2. ヘルバルト心理学の概要

続いてヘルバルト心理学の概要について見ていくことにしたい。ヘルバルトがその心理学を発表したのは19世紀前半のことであり、その影響はドイツだけに限らない。それは円了の学んだイギリスの連合主義的な心理学も例外ではない。

ヘルバルトは教育学の樹立を目指し、教育学の方法を心理学に求めた。このために独自の心理学を構築している。アリストテレス以来、心には先天的に知・情・意の三つの能力が備わると考えられてきた。円了が学んだ連合主義的な心理学も基本的にこの伝統をふまえている。しかし、ヘルバルトによれば、心は知覚や思惟といった特別の能力をあらかじめ有するのではなく、ただ外界との交互作用の中であって、自らを保存しようとする自己保存の能力しか有さない。そして心が感覚を通して外界に対して働きかける自己保存の努力は観念となって意識され、この観念は心の中に永久に存在する。意識とはこのような観念の相互関係と交互作用だと言っていい。この意味で観念と呼ばれるもの以外に、知・情・意といった先天的な精神能力を仮定する従来の心理学は、観念の内的状態に過ぎないものを客観的な存在にすり替える誤謬を犯すものとして批判される。こうしたヘルバルトの心理学にあっては理解力や記憶力も特殊な人間精神の能力ではなく、観念の諸状態からの単なる抽象に他ならないとされる。

ヘルバルトによれば、一度形成された観念は不断に自己保存の努力を続け、意識を占有しようとする。しかし観念の数は夥しく雑多であるので、互いに自己保存を行う観念と観念の間には、抑制し合ったり(例えば白と黒のように)、結合し統一したり、様々な交互作用が行われる。抑制作用では甲(白)と乙(黒)が互いに抑制・排除し合った結果、それぞれの観念が持つ量的な強度を減殺し合い、互いを不明瞭なものとして意識から消滅させようとする。量的な強度を失った観念は単に自己保存の努力を続けるだけのものとなり、意識から消えて沈潜し、これが無意識となる。こうした抑制の量的な関係は力学的な運動の法則に従うとされる。観念が量的強度を失うか、最小限度の強度を維持してなお意識されるかという意識の限界線は「意識の閾」と呼ばれる。観念は抑制し合うばかりではなく、自己保存の力が類似する場合は、互いに結合し強化し合うことでその明瞭性を増大させる。意識の閾下に沈潜した観念は意識下に沈下させた原因が除去されれば、再び閾上に浮上して明瞭性を増大し、意識面を占有する。

こうした抑制と結合の結果、観念は相集まって観念群を意識に作ることになるが、新に到来する観念は、すでに意識内にできあがった観念群に対して、抑制あるいは結合を通し

て摂取同化される。この過程をヘルバルトは統覚と呼ぶが、この統覚が完全に行われるためには、旧観念群との関係において、新たに統覚されるべき新観念群に意識を集中することが必要とされる。このように新観念群の中において旧観念群と全く無関係のものは排除され、関係のあるものだけが意識面上上がることが許されなければならない。このように観念をさらに統覚された観念群へと成長させる意識の集中が、注意であるとされる¹³。

円了がこのようなヘルバルトの言説を知ったのは比較的早い時期のことだった。東京大学在学中に円了が作成したノート「明治十六年秋 稿録」にヘルバルトの名前を見つけることができる。円了はユーバーヴェグ(Friedrich Ueberweg)の『哲学史』をゲオ・モリス(Geo.S.Morris)による英訳で読んでいる¹⁴。稿録ではプラトンやカント等の哲学の定義を書き出す中に「ヘルバルトは、哲学を諸概念の仕上げと定義する」¹⁵と、ヘルバルトによる哲学の定義も書き出している。この『哲学史』はカントやヘーゲルと並んでヘルバルトにも一章を割いており、前述の意識の閾をめぐる諸観念の葛藤に関するヘルバルトの説を紹介している¹⁶。円了による書き出しはこのヘルバルトに関する章からなされており、円了がヘルバルト心理学の概要に目を通していたことは間違いない。しかし稿録を見る限り、ヘルバルトについてこれ以上ふみこんだ言及はない。ノートを作成した時点の円了のヘルバルトに対する関心は、あくまでも哲学史の文脈に限られており、哲学の定義を開陳した哲学者の一人という程度にとどまったと考えるべきだろう。ヘルバルトの心理学的言説が日本に本格的に紹介されていくのは明治20年代半ばまで待たなくてははいけない。

3. 連合主義的心理学の記憶・忘却観

明治初期から明治20年前後にかけて教育界を中心に広く受容された心理学は、ヘヴン(Joseph Haven)やベイン(Alexander Bain)、サリー(James Sully)といった、イギリスの連合主義的な心理学の流れに属するものだった¹⁷。円了はベインとサリーを積極的に学んでいる。明治26年11月から翌27年10月にかけて発行された『哲学館講義録 第七学年度妖怪学』で、円了は人間の感情について説明する際に、サリーの心理学に基づいたことを明らかにしている¹⁸。また円了旧蔵洋書にサリーの *Outlines of Psychology with Special Reference to the Theory of Education* (以下 *Outlines of Psychology* と略称)を見つけることができる¹⁹。

ベインやサリー等の連合主義的な心理学は、円了の心理学的な知見を構成し、忘却術

を生み出す上でも大きな役割を果たしたと考えられる。後述するように円了の忘却術では注意が重要な鍵となっている。主に注意と記憶・忘却観、ヘルバルト心理学との関係に注目しながら見ていきたい。

紙数の関係もあるので主にサリーの著書を見ていくことにしよう。明治 20 年に近づくとペインはそろそろ古くなり、サリーの *Outlines of Psychology* は最新の心理学の知見をバランスよく網羅しているという点で歓迎された²⁰。有賀長雄はサリーのこの著書に基づき、『教育適用 心理学』(明治 18 年 11 月版権免許)を出版している。

サリーは *Outlines of Psychology* に基づき教育現場における実践を説いた *The Teacher's Handbook of Psychology. On the Basis of "Outlines of Psychology"* (以下 *Teacher's Handbook* と略称)を別に著している。こちらの書は明治 21 年に和久正辰が『左氏 応用心理学』として翻訳、出版している。有賀と和久の訳書はともに師範学校の教科書として広く用いられた²¹。

有賀はサリーの著書を忠実に翻訳してはいない。有賀は第一章から第三章まで、心理学の定義や必要性、脳や神経の構造等に関して、原書にはない新たな章を補っている。第四章以降は、心の成長や注意力・感覚力・知覚力・記憶力等を論じた章で時に削除や加筆、記述の順番を入れ替える等の変更を行うが、基本的に原書に従って訳出している。

サリーはヘルバルト心理学の知見を所々に援用している。有賀はこうした箇所も削除している。例えば、記憶の保持と想起に関する箇所²²を訳出する際、有賀はこの箇所が続く休息後の想起に関する説明を削除している。この削除に伴い、削除箇所に付された次の注も削除されている。

[前略]ヘルバルトが最初にその重要性を認識したこと、そこから何かを学ぶことができるかもしれない。私は彼が表象の上昇と下降と呼んでいるものに言及している。境界強度を超える全ての表象は、徐々に最大まで上昇し、徐々に下降する。そして、それらが完全に意識の閾値を下回った時、プロセスは継続するようであり、それらの「復活」までに経過する時間が長くなればなるほど、復活した時にそれらはより弱く現れて、よりゆっくりと上昇する[後略][※拙訳]²³。

有賀によって省略されたこの箇所からは、サリーにとってヘルバルト心理学は既知のものであり、その考察にも影響を与えていたことが分かる。

それでは、注意について見ていくことにしよう。サリーは心的能力を知情意に分割し²⁴、

注意を意志に関係する作用として位置づけ、一章を割いて論じている。サリーは冒頭で「これまで見てきたように、注意は心の活動的な側面と意志の法則に密接に関連する、我々の精神活動の一般的な状態である〔※拙訳〕²⁵と述べる。有賀はこの箇所「心焉ニ在ラザレバ、視テ而シテ見エズ、聴テ而シテ聞エズ、食テ而シテ其味ヲ知ラザルナリ」²⁶と加筆し、注意の重要性を強調している。「大学」の一節の利用は、心理学上の注意の働きを日本の読者に理解させるための工夫と言えよう²⁷。

このような注意の重要な作用として「凝聚(Concentration)」²⁸が挙げられる。この作用は表裏一体とも言える二つの相に分けられる。「其最モ重大ナル者ハ永ク注意ヲ一個又ハ一部ノ目的ノ上ニ止メテ、苟モ之ニ関係セザル一切ノ目的ヲ意識ノ表面ヨリ排除スルコト是ナリ」²⁹。この注意の作用には特定の対象への意識の集中とともに、意識の範囲からの他の対象の排除が含まれている。

後述するように忘却術が注意を縛り付ける苦悩の除去を目的にすることを考えれば、注意のコントロールは重要だ。サリーは、注意を意志が介在する余地が少なく反射的-受動的なものと意志によるコントロールが可能なものに分ける。「無意注意」と「有意注意」の関係は対等ではない。例えば学生が抽象的な事柄に注意していても美しい音楽が聞こえてくると、知らず知らずのうちに注意をそちらに転じてしまう³⁰。無意注意に対する意志の力は弱いのだ。このような無意の注意を意志の力で導くためには、興味が重要となる。興味は無意注意にも強い影響を与える。意志の力で適切に興味の対象を選べば、有意注意は無意注意の助けも借りてその対象に強く働くことができる³¹。

忘却と記憶の問題に目を転じよう。サリーは想起に必要な要素として、観念の強さ(記銘時の注意と保持の反復で強化される)と観念の連合を挙げる。観念の連合には、類似・対比・時間や場所の接近という三つの原理がある(原因(例・熱)と結果(例・金属の膨張)は時間上の接近に含まれる³³)。類似の原理は、事物の類似性あるいは同一性に対する知覚に起因する。対比は同一性を前提としている点で、接近も類似を媒介にする点(例えば日没から夜を想起するのであれば、現在の日没の体験と、夜をひきつれてきたかつての日没の体験との類似を媒介にする等)で、ともに類似の原理に帰する。サリーは記憶よりも高度な思考も類似から説明を行う。概念を形成する力は形象の類似に基づく点で、断定する力は概念間の類似に基づく点で、推理する力は関係の類似に基づく点で、それぞれ類似に基づいている。思考は類似を共通の柱として記憶の上に位置づけられている。

このような類似・対比・接近の原理は想起時だけでなく記銘時にも求められる。サリーは *Teacher's Handbook* において記銘時の記憶について、「(一)新事項ノ各部ヲシテ彼此互ニ

相聯結セシムルコト」と「(二)新収ノ知識ト旧得ノ知識トヲシテ又タ互ニ相聯結セシムルコト」³⁴を挙げる。(二)の新・旧知識の間で連合を働かせることで想起を容易にするということは理解できる。が、(一)は少し説明が必要だろう。新たな事項の各部分を関係づけることがなぜ連合を応用することになるのか？それは前述したように概念力・断定力・推理力からなる思考を使い、各部分の関係性を理解することは、記憶の原理(類似)を活性化し、記憶の労力を節約すると同時に記憶を確実にすることができるからだ³⁵。

サリーはこのような記銘時の新たな記憶の工夫と暗誦による記憶を対比させ、「天然ノ関係ニ從テ事物ヲ聯結スルコト愈々多ケレハ、其口話的記憶力〔暗誦による記憶：筆者注〕ヲ労苦セシムルコト愈々少シ」³⁶とする。そしてこの新たな工夫に関して、次のようなエピソードを挙げている。

夫レ記憶的労力(Memory-labor)ナルモノハ、緊要ナル事項ヲ抽抜シテ、緊要ナラサル事項ヲ放棄スルトキハ、大ニ之ヲ減省スルヲ得ヘシ。往時シモンデスガセミストクルスニ向テ記憶術ヲ授ケヘシト発言シタルトキ、セミストクルスハ之ニ答テ「寧口余ニ授クルニ忘却術ヲ以テセヨ」ト曰ヒタルコトアリシト云フ³⁷。

古代ギリシャの記憶術の大成者と言われるシモニデスが記憶術の伝授を申し出たところ、セミストクルスは忘却術の必要性を訴えたというエピソードである。訳書を介して古代の忘却術の存在が日本に紹介された例として留意しておきたい。が、セミストクルスは記銘時の情報の取捨選択ではなく、忘れたい記憶の想起を問題にしているのでエピソードの利用にはミスマッチがある。が、言わんとするところは、記銘時の新・旧知識間の連合と各部分の理解という、記憶の新たな工夫は、関係性の薄い情報を捨てることを伴うので、テキストの暗誦という完全な記憶に比べれば、忘却による浸食を許すところが大きいということであろう。

サリーは *Outlines of Psychology* において確実な想起と完全な忘却の間には、様々な想起と忘却のバリエーションが存在すると言う³⁸。有賀はこの想起と忘却の関係について「追憶ト忘却トハ畢竟度量ノ差等ナルノミ。別異ノ作用ニハ非ザルナリ」³⁹と説明を補っている。想起と忘却の関係は、言ってみれば写真のポジとネガのように表裏一体の関係にある。どこまで行っても、想起と忘却にこのような表裏一体の関係を見る、こうした考え方にあっては、記銘時の新たな記憶の工夫にすでに忘却の浸食の跡を見ることも首肯できる。完全な想起と完全な忘却の間にあっては、どのような想起であっても忘却を免れるわけにはいか

ないし、いかなる忘却も不完全な想起であることに留まり続けるしかない。

サリーは想起と忘却のバリエーションの問題に続いて、想起を可能にする要素を興味・注意・反復・観念の連合・身体的状況に整理している。とすれば、想起のネガである忘却の原因にはそれらの欠如が挙げられよう。注意や反復(あるいはそれらの欠如)は朱子学でも記憶や忘却の原因に挙げられていた⁴⁰。連合主義的な心理学において、新たに加えられたのは観念の連合である。記憶力の発揮の際に求められるのは、記憶独自に認められた原理の実現なのだ。これに伴い忘却の原因にも連合の欠如が加えられる。忘却の原因は心に備わる万能とも言える根源的な力(陰陽)から説明されることはもはやない。忘却の原因は連合の欠如という、記憶の原理の実現の失敗という点から理解される。以上のような立場からすれば、忘却は失敗である限り多分に偶発的であり、克服は目指せても、これを意識的に引き起こすことは難しそうだ。

こうした考えをふまえて忘却は程度の違いに応じて、「幾分忘却」と「全部忘却」の二つのレベルに分けられる。「幾分忘却」とは、「即チ未タ全ク忘却スルニ至ラズトイヘトモ、其時ニ臨テ暫ク忘却スルモノタルナリ」⁴¹。「全体忘却」とは「何如ニ努力ストモ到底全ク追憶シ難キ」⁴² 完全なる忘却を指す。サリーは「幾分忘却」の説明に以下の補足説明を加えている。

このような部分的または一時的な物忘れは、どんな時でも、我々の興味を引き、注意を占めている感覚的な印象や関連する考えが現在興味のない表象や観念を締め出すのに役立つことを示唆している。明瞭な意識の領域は非常に限定された領域を持ち、諸印象と諸表象からなる分離された塊や集合の間には絶え間ない対立があり、それぞれが明確な意識の領域から他のものを追い出したり締め出したりする傾向がある。〔後略〕〔※拙訳〕⁴³。

ヘルバルト心理学の言説をふまえての説明であることは明らかだ。しかしこの忘却観は、連合の欠如を忘却の原因に見る連合主義的な忘却観と一致しない。この補足説明でサリーは連合主義的な忘却観とヘルバルト心理学的な忘却観を並記している。有賀はこの補足説明を大幅に省略し「即チ後ニ入りタル印象ニ因テ、前ニ入りテ現時ノ利害ノ関スル所ニ非ザル者ヲ蒙蔽セントスル事是レナリ」⁴⁴と訳すにとどめている。

連合主義的な心理学の忘却観では意図的な忘却は難しい。が、サリーはヘルバルト心理学の影響も受けている。*Outlines of Psychology* でサリーはヘルバルト心理学を援用し「動念ノ相賛軋轢」を論じている⁴⁵。「動念ノ相賛」とは、複数の衝動が同時に起り互いに助

け合うことで一つの動作を生み出すこと⁴⁶、「動念ノ軋轢」とは同時に起った複数の衝動が対立しそれぞれが勝手な動作を生み出そうとすることである⁴⁷。意識の闕下への沈潜という点では、後者の軋轢が重要である。サリーはこの衝動間の軋轢による互いの勢力の抹消の様子が注意による排除に似るとする。

心意ハ同時ニ一個ヨリ多キ印象ニ注意スルコト能ハザル者ナルガ故ニ、一方ニ注意ヲ牽引スル者有ルトキハ、之ヲ他方ニ向クルコトヲ得ズ、之ト同様ニ、同時ニ実行スルコトヲ得ル所ノ発作ノ衝動モ必ス一ニ止マリ、若シ他ニ之ト異ナル方向ニ対スル衝動アルトキハ、必ス最初ノ動念ヲ制止シ破毀セントスルナリ⁴⁸。

このような考えによれば、注意のコントロールを通してヘルバルト心理学的な意味での忘却を起こすことも可能となるだろう。

4. ヘルバルト心理学の流布

明治 20 年代に入ると、ナショナリズムの気運の高揚に応じて、海外から紹介される教育思想も近代的国家の国民道徳の涵養という点から、ドイツ教育学が歓迎されるようになる。こうした状況の中、ドイツから招聘されたのがハウスクネヒト(Emile Hausknecht)であり、ハウスクネヒトが依拠したのがヘルバルト派の教育学だった。帝国大学で行われたハウスクネヒトの講義は谷本富・稲垣末松・山口小太郎・本荘太一郎・澤柳政太郎・湯原元一らにより聴講された。ヘルバルトの著書は難解だったことから、その紹介にはヘルバルトの教育学に強い影響を受けたケルン(Hermann Kern)やリンドネル(Gustav Adolf Lindner)、ライン(Wilhelm Rein)の著書が用いられた⁴⁹。

明治 20 年代を通して、これらハウスクネヒトの教え子たちによりヘルバルト派教育学が積極的に紹介されていく。ケルンの著書については、山口小太郎訳『教育精義』(明治 25 年 11 月)、國府寺新作訳『新版増補 ケルン教育学』(同年同月)、澤柳政太郎・立花銚三郎訳『格氏 普通教育学』(同年 12 月)等が出版されている。

ケルンと並んでリンドネルの翻訳も多く出版された⁵⁰。有賀長雄訳『麟氏教授学 上・下巻』(明治 20・21 年)、湯原元一訳『倫氏 教育学』(明治 26 年 5 月)、稲垣末松訳『麟氏普通教育学』(明治 26 年 9 月)等が出版されている。

このようなヘルバルト派教育学の普及によりヘルバルト心理学の言説も広がっていった。湯原の『倫氏 教育学』はリンドネルの *Allgemeine Erziehungslehre* を訳出したものであり、当時最もよく読まれていた⁵¹。湯原の訳書でヘルバルト心理学紹介の様子を見ていこう。

有賀によるサリーの訳書ではたびたび削られたヘルバルト心理学の言説だったが、ヘルバルト派教育学ではもはやそうした心配はない。

曾て一たび吾人の意識中に生じ、他の原因によりて退斥せられて、今は已に朦朧たる表象も、其実は全く消失したるにあらず、若し適宜の状態来るに逢へば彼は再び覚醒し、且其光彩を放つものなるを知るべし。斯くの如く、一旦其光りを蔽はれたる表象の、意識中に於ける復帰を名けて復現と云ふ⁵²。

リンドネルは「意識中に於て、実際に生ずる明瞭なる新表象と、他より退斥せられて朦朧なる旧表象との間に、一箇想像上の境界線を画し、之を意識の閾と称す」⁵³と説明する。「此保存復現の作用、能く全きを得て、初めに異ならざるものを復生するときは、之を称して、記憶」とし、更に記憶と忘却について「記憶に類似する心意的動作は、想起追憶にして、之に反対なるを忘遺」⁵⁴と述べている。前述の概要で見たように、このような忘却(退斥)と想起(復帰)が絶え間なく繰り返されることで意識の中の観念群が形成されることを思い出せば、忘却は想起とともに精神的な活動を支える必要不可欠な活動、言わばその新陳代謝機能の一つであると言って良い。忘却には独自に発生のメカニズム、その原理が見出される。

意識の閾下への沈潜を忘却と呼ぶのであれば、意識の範囲からの対象の除外に関わる注意は忘却と大きく関わることになるだろう。リンドネルは注意を「某の物体にのみ附属する表象に於て、則ち狭隘なる表象圏内に於て思想を集合する作用」と定義する。同時にそれは「之に附属せざる他の総ての表象を排去するの作用」⁵⁵でもある。リンドネルは心理学についても *Lehrbuch der empirischen Psychologie als inductiver Wissenschaft. für den Gebrauch an höheren Lehranstalten und zum Selbstunterrichte* を著しており、この著作は田中治六・三石寅吉によって『麟氏 実験心理学』として翻訳され、明治 27 年 8 月に出版されている。同書でリンドネルは注意の集中と排除という作用を「注意ハ常ニ心意発動ノ焼点ニ存スル単一ノ物体ニ向ヒ、而シテ之ト相関聯セル凡テノ物体ハ其周辺ニ集合ス、是ニ反シテ、之ト相異ナレル物体〔中略〕ハ総テ意識ノ水平以下ニ圧出セラルイモノナリ」⁵⁷としている。注意はその対象となる観念とそれに関する諸観念以外のものを意識の閾外へ押

し出す作用を有する。この効果を考えれば、注意はヘルバルト心理学においても忘却を引き起こすものであると言えるだろう。

このような注意は対象の排除を行う点で忘却にも近づくが、観念の構成にも欠かせない。一つの対象にしぼる注意の作用は、観念の統合に非常に大きな役割を果たす。注意には意図的なものと、そうでないものがあるが、教育において重要なのは意図的な注意である。リンドネルは Allgemeine Erziehungslehre において「一箇の新表象の、其力尚ほ微弱なるもの、意識中に入り来るに当りて、其諸部より、復現作用の補助一斉に起りて、之を迎へ、新入の表象を奉じて、其注意圏の中心点となすときは、是則ち有意の注意の動作なり」⁵⁸とする。学習者の意識に入ってくる多くの観念は未整理で雑多であり、学習に必要な観念が必ずしも十分な強度を以て現れるとは言い難い。そんな中で必要な観念を逃さずに既得の観念に統合していくことができるのは注意のおかげなのだ。そして「注意を喚起するに適するものを称して、興味」⁵⁹としている。

5. 井上円了『失念術講義』

以上のような三つの忘却観を円了はどのように接合していったのだろうか？『失念術講義』の成立を考える上で円了は非常に重要な講義を行っている。「心理論」と題されたこの講義は『失念術講義』の原型と言っても良いものだった。この講義は明治 25 年 11 月 25 日発行の『哲学館講義録 第六学年度』第 3 号と翌 26 年 10 月 5 日発行の『哲学館講義録 第六学年度』第 34 号に分割掲載された。分割されたこの講義を後に合冊した際の編者の言によれば、この講義は澤柳政太郎とともに円了が担当した心理学の講義の一部だったようだ⁶⁰。テキストである『心理摘要』を補う形で行われたこの講義は「意識論」と「注意論」に分かれている。

まず円了は「意識論」において意識について「現在ノ心ノ有様ヲ直接ニ覚知スルコトニテ不現在ハ意識中ニ入ラズ」とする。

意識ノ覚知スル所ハ唯直接現在ノ想起覚知ニ限り、其ノ所謂蓄蔵セラレツハアル知識ニ及ハサレハ何ソヤ。是其ノ知識ハ理論上即チ推理ノ上ニ於テ我脳髄中ニ消滅シタルニアラズト云フ迄ニテ、其ノ意識ニ上ラサル間ハ其ノ果シテ蓄蔵シテアリシカナキハ得テ知ル所ニアラズ。故ニ蓄蔵スル知識ハ記憶ニ属スルモ意識ノ範囲ニ属セサルナ

り。意識ハ唯タ我心面ニ現出スル知識ノミニ関スルナリ。

記銘・保持・想起のうち、意識にとって問題となるのは記銘時および想起時の記憶なのであり、現在の認識に捉えられない保持は意識の範囲外、言わば無意識の領域にあると言っているだろう。

この「意識論」では、意識と無意識の関係についての円了の考えを知る上で見逃せない比喩が登場する。

意識ヲ解シテ心ノ光ト云フ。即チ心内ニハ色々ノ観念アルモ闇然トシテ見ルヘカラス。然ルニ一タヒ意識ノ光ヲ以テ之ヲ照セハ判然ト分明ニ認知スルヲ得ルナリ。猶ホ一室内ニ諸物アレトモ暗夜ニアリテハ少シモ見エサルニ、一ヒ灯明ノ光ニ照サルレバ歴然ト見分ケラルハガ如シ。而シテ其灯明ノ室内ノ各部分ノ次第ヲ追フテ照シ行ケバ満室ノ物品次第ニ見分ケラルハガ如ク、心内ノ諸知識モ之レヲ照スニ従テ次第次第ニ認知セラルハナリ⁶¹。

心を一つの部屋に、意識をその中の灯明に例えれば、灯明に照らされない闇の部分は無意識にあたると考えて良いだろう。意識は部屋の全てを照らすには十分ではなく、わずかにその周囲を明らかにするだけである。しかし灯明＝意識は固定されておらず、手燭の灯のように、ゆらゆらと心の中を動き回る。

ここで前述したように、円了が心の中に陰陽の存在を措定しており、この存在が心の内部に運動体としての性格を担保していたこと、そして理性を陽的なものとして捉えていたことを思い出したい。朱子学にあっては陽が宿る魂は、冷たく静的な魄に対して、明るく動的なものとして捉えられていた⁶²。これらのことを考え合わせれば、光を放ちながら動き回るという意識のイメージの源の一つには、円了が再解釈した魂－陽のイメージがあったと考えられよう。

さて、このような「意識論」に続き、円了は「注意論」を展開する。円了は議論に先立ち注意の定義を「注意ハ心カヲ強ムル作用ニシテ其ノ時ニ於ケル作用ハ恰モ顕微鏡又ハ望遠鏡ノ肉眼ニ於ケルカ如シ」とする。顕微鏡に例えられる注意には、前述の心理学的言説の中で確認した注意の作用、集中と排除がふまえられていると見て良いだろう。

続いて円了はサリーと同じく注意の種類を「無意自然ニ起ルモノト有意ニ起ルモノトノ二種」に分類する。無意の注意は更に「身体自然ノ活動ヨリ起ル者ト情感上願望スル所ア

リテ起ルモノト二種」に分けられる。このような二種類の無意の注意について、円了は「身体自然ノ活動ヨリ起ル者ハ意カヲ以テ制止セント欲スルモ能ハス。願望ヨリ起ル者ハ意志ハ之レニ抵抗セントシテ或ハ克チ或ハ克タサルコトアリ」とする。願望等からつい注意が向いてしまうことについて、円了はある程度意志によるコントロールの可能性を認めている。この可能性は忘却術にとって重要である。後述するが、感情や願望にからみとられた無意注意を意志の力でコントロールできるか？という問題は術の成否にかかわるものだからだ。

このような注意と意識は深い関係を持つ。円了は注意を「注意ハ意識ノ焼点ニシテ心ノ全カヲ一点ニ集ムル作用ナルガ故ニ、此ノカノ強キ者ハ尋常ナル者ヨリモ余計ニ物ヲ覚ヘ、又深ク事ヲ考フルコトヲ得ル筈」とする。「注意論」が「意識論」に続いて論じられる所以であろう。こうした注意の効果があればこそ、「物ヲ見ルニモ汎然トシテ広ク見レバー々ニ就テ明ナラサレトモ、或ル一点ニ集ムレバ甚タ明瞭ニ見ユル者ナリ」。このような注意の効果の例を学問の世界に探せば、「専門学ニ従事スル者ハ外ノ事ハ知ラズトモ、其ノ一事ニ就テハ甚タ深奥ナル者」が挙げられる。円了は普通教育を終えた後は専門教育に進学することを勧める。その範囲が狭ければ狭いほど注意の効果が期待できるからだ。教育者は注意力の育成に努めなくてははいけない。「児童ノ注意ヲ養フハ興味ヨリ善キハナシ。是レヘルバルト派ノ盛ニ興味ノ必要ヲ説ク所以ナリ」。

ここでヘルバルト派教育学において注意と興味が知的拡張に欠かせないものとされていたことを思い出したい。新参の観念群の理解と記銘-保持のプロセスに注意が大きな役割を果たし、注意が興味により喚起されるというヘルバルト派の議論を思い出せば、普通から専門へと学習段階を進める上での注意の重要性を訴える文脈で、円了がヘルバルト派教育学の興味の問題にふれるのは理にかなっている。この講義を行った段階で円了にはヘルバルト派教育学の正確な知識があったと考えられる。

ヘルバルト派にとっての興味の重要性にふれた後、円了は注意の発揮について次のように言う。

人ガ眼ヲ開キテ考ヘタル時分ラサル事モ眼ヲ閉チテ考フレバ分ルコト多シ。是レ周囲ノ事物ガ眼ニフレテーノ注意ヲ攪乱スルヲ防クレハナリ。〔中略〕人夢中ニ於テ夙ニ忘却シタルコトガ偶然ニアラハレ出ルコトアリ。〔中略〕是レ何故カト云フニ、雑然タル思念ノ一切止ム時ハ睡眠中ナリ。而シテ昼間憶出センガ為メニ脳カヲ振盪セル余カノ此ノ間ニ再起シ、独り其ノ事ニ関スル脈絡ヲ追フテ遂ニ之ヲ憶出シ又ハ考想スルコトヲ得シモノナリ。

問題の解決や夢中での想起の原因は、散乱を収めた後の注意の回帰に求められる。円了はこうした注意の散乱が忘却をもたらすメカニズムを、心理学的な知見を使って説明しようとする。

注意ハ思想聯合ノ関係ヨリシテ次第ヲ追フテ移転スル者ナリ。仮令ヘバ a ヲ思ハントスル時ニ其ノ前ニ当リ cde ナル事柄ニ関シ思考シ居タリトセバ、今ハ思想聯合自然ノ作用ハ fgh ノ脈絡ヲ経テ進マントスル傾ナルヲ以テ a ヲ思ヒ出スコトハ甚タ困難ナル者ナリ。又ハ a ヲ思ハントスル矢先ニ卒然 lmn ニ関スル事件ノ目前ニ起ル場合ノ如キハ、思想ノ傾キハ直チニ茲ニ一転シテ更ニ opq ニ向テ進マントスルガ故ニ、a ヲ思ヒ出スコトハ益々困難ナル者ナリ。

この説明で見逃せないのは、末文にあるように、それまで注意が辿っていた連合が全く別の事件によって中断され、注意がそれまでの連合とは異なる、突発的な事件から生じる新たな連合を辿りはじめるようになると、それまでの連合が思い出しにくくなるとされている点だ。この場合の円了が言う思い出しにくさとは、前述の保持と意識の問題をふまえれば、意識の表面への現れにくさと考えて良いだろう。新たな別の観念の連合が現れることによる旧観念の意識への現れにくさ、それはヘルバルト心理学が言うところの忘却に他ならない。円了がヘルバルト派教育学についての知識を持っていたことを考えれば、この忘却のメカニズムについての説明は、ヘルバルト心理学の言説をふまえてのものと考えて良いだろう。

注意の散乱がもたらす忘却のメカニズムをヘルバルト心理学によって説明を行った後に、円了は、あらためて次のような具体例を挙げて、再度注意の散乱と回帰という点から忘却と想起を論じ直している。

下婢ガ物ノ置キ場所ヲ忘レタル時ニ主婦怒声ヲ発シテ之ヲ詰レバ、狼狽ノ余リ却テ其ノ在処ヲ憶ヒ出ササルガ如キハ、是レ遺忘品ヲ捜シ出サントスルノ注意ハ一転シテ若シ紛失セシナラバ主婦ノ怒リマスマス甚シク、遂ニ身ノ上ノ難儀ニ及ハンカヲ憂フルノ一点ニ深キ注意ヲ致スヲ以テナリ。試験場ニ在リテ何程考ヒテモ思ヒ付カサルコトガ、場外ニ出レバ忽チ思ヒ出スコトハ往々学生ノ経験スル所ナリ。是レ制限アル時間中ニ多クノ問題ニ答ヘサルベカラサルヲ以テ注意ノ頗ル変転シ易ク、一事ニノミ全量ノ意ヲ集ムル能ハサルモノガ、已ニ試験場ヲ離ルレバ諸多ノ注意ハ既ニ散ジテ、思ヒ出

サバリシ一点ノミ残ルヲ以テ曩ニ注意ヲ分チシモノハ悉ク此ノ一点ニ会帰スルヲ以テナリ⁶³。

前述のように、江戸時代では、流動的な心の偏在や散在が認識の消失を招き、その克服にはそうした心の乱れを元に戻すことが求められた。この引用で述べられた忘却と想起の考え方には、そうした江戸時代の記憶・忘却観が見て取れる。こうした記憶・忘却観は、注意を生み出すところの意識に円了が与えた動的な魂－陽のイメージとも符合する。

円了がこの「注意論」で行おうとしたことは何だったのか？一連の議論の流れを見ると、それはヘルバルト心理学を利用してこのような江戸時代の記憶・忘却観を復活させることだったのだと言えよう。先走って言えば、これ以降、忘却の説明には主にこの復活した言説が用いられる。ヘルバルト心理学は復活した言説の裏打ちとして後景に退くことになる。

それにしても、その忘却観に大きな影響を与えたヘルバルト心理学の知識を、具体的に円了はどのように得たのだろうか？東京大学在学中にその概要を知っていた円了にとってヘルバルト心理学の再受容はさして難しいものではなかったであろう。現在のところ主に三つの受容のルートが考えられる。一つ目は円了が学んだサリーの心理学である。その心理学には断片的だがヘルバルト心理学の忘却観が挿入されていた。円了の旧蔵書中に *Outlines of Psychology* があったことを考えれば、円了は省略なくそれらの箇所を読んでいった可能性がある。二つ目はヘルバルト派教育学の流布とそれに関わる円了周囲の人間関係である。前述のように「注意論」の発表と同時期にはリンドネルやケルンの翻訳書がさかんに出版されていた。それだけではなく、哲学館で心理学の講義を担当した澤柳政太郎はハウスクネヒトの教え子であり、「心理論」が出版された同じ時期にケルンの著書を翻訳している。また『麟氏 実験心理学』を翻訳した田中治六は円了の「妖怪学講義」の著述を手伝っている⁶⁴。このような翻訳書の流布と人間関係を通して円了がヘルバルト心理学への関心を新たにすることは大いにあり得ることだ。第三は円了の独習である。今回、井上円了哲学センターの協力により、円了旧蔵洋書について詳しい調査を行うことができた。円了旧蔵洋書にはヘルバルト派の書物がある。その一つにデ・ガルモ(Chas. De Garmo) によるリンドネルの著書の英訳 *Manual of Empirical Psychology as an Inductive Science. A Text-book for High Schools and Colleges* がある⁶⁵。この書はヘルバルト派教育学の土台となるその心理学を概説したものだが、円了旧蔵本には、記憶に関する章に鉛筆によるアンダーラインが認められる。アンダーラインは主にヘルバルト心理学における記憶と忘却それぞれの定義やメカニズムの説明の箇所に引かれている。そうしたアンダーラインの箇所に

は、「想起の反対が忘却である〔注：拙訳〕」、「意識に復活する能力を失った観念はそれに反対する観念の強度と数に比較した時、再生のための補助を失っている状態に置かれるか、無意識に置かれる〔注：拙訳〕」⁶⁶ といった記述がある。前者は前述の通り、ヘルバルト心理学の忘却の定義とも言える箇所であり、後者は忘却状態にある観念についてふれた箇所である。この書を円了がいつ頃に読んだのか、「注意論」構想の前なのか後なのか、現在の調査ではよく分からない。しかしその構想よりも前だとすれば、こうした知識が「注意論」中の忘却観の下敷となった可能性は大いにあり得る。

円了は明治 26 年 12 月 20 日発行の『哲学館講義録 第七学年度妖怪学』第 4 冊 8 号において、「妖怪研究会広告第四回三項」を出している。その中で円了は次のような疑問への回答を読者に求めている。

世に記憶術あるも失念術なし。而して失念は記憶と同様に必要なるものなり。例へは失策失敗して余り其事に懸念したるために精神病を起せるものあり。若し其人にして一たび其原因を忘るゝことを得は精神病を起す筈なく又其病も速に治すべし。〔中略〕以上の如き場合には失念術の必要を感じるなり。〔中略〕失念術の方法如何。

忘却術の方法を知らせてほしいという聞き方が分かりづらいと思ったのだろうか、明治 27 年 3 月 5 日発行の『哲学館講義録 第七学年度妖怪学』第 9 冊 17 号では、「人の不幸災難にかゝるときに之をアキラメル方法人によりて同じからず。若し特殊の方法を用ふるものあらば之を示されんことを望む」と募集し直している。ここに、江戸時代の忘却術では副次的なものでしかなかった意識からの観念の消去を術本来の目的とする、人工的に忘却を引き起こす術の構想が本格的にはじまることになる。

このようなメディアを使った募集の他に、『失念術講義』で明らかにしているところによれば、円了は年来この問題に関心を持ち続け、会う人ごとに「不幸災難に際会したるときは如何に其心を慰め如何して其事を諦むるか」⁶⁷と聞き取りも行っていたようだ。3 月 5 日の再募集と聞き取りの文言を見ると、円了が、諦めや心を他に転じることが忘却を招くという考えを前提に調査を行っていたことが分かる。ここで「注意論」の忘却に関する考察を思い出せば、メディア上の募集や直接の聞き取りを通して、具体的な証拠により「注意論」の考察の裏付けをとろうとしたのだと言えよう。

円了は明治 27 年 10 月 20 日発行の『哲学館講義録 第七学年度妖怪学』第 24 冊 48 号の中で、記憶術に関係して忘却術に言及している。円了は忘却術の方法について基本

的なコンセプトを次のように述べている。

其方法は全く記憶術の反対にして、記憶を妨碍する方法を取らざるべからず、例へば記憶を強からしめんと欲せば一点に注意せんことを要すれども、之を失念せんと欲せば他の諸点に注意を散じて、此一点に聚まることを妨げざるべからず。

忘却の方法を記憶の方法の反対と捉えている点は、デ・ガルモの英訳において円了がアンダーラインを付した箇所が思い出される。このようなヘルバルト心理学の援用が見られるが、ここでもその忘却の方法に用いられるのは「注意論」と同じく注意の散乱である。「注意論」は、散乱後に注意が回帰することによって想起が可能となる事態を説明するものであった。このコンセプトは「注意論」の説明をあらためて忘却の発生という点から整理し直したものと言えるだろう。48号ではこれ以上の詳しい説明はされず、「他日その方法を組織して世に示す所あらんとす」と予告して終わっている。

予告通り、その内容は明治28年8月に『失念術講義』にまとめられた。円了は「第二章 失念術の利益」・「第三章 失念術の解釈」の章で、忘却術が無いために不幸な体験の記憶に苦しまなくてはいけない問題を挙げる。しかし、読者の頭には次のような疑問も浮かぶであろう。「何者人の不幸災患を忘るゝ能はざるか如きは、其方に集めたる注意を他に転する能はざるに由るのみ。通俗の語を以て之を言へは、諦らめること能はざるによるのみ。敢て失念と云ふに非ず」。この疑問に対して、円了は日常的に我々が「彼事を失念したり」と言う場合、それは「彼事」の記憶が完全に消滅したことを指すのではなく、それらの観念を心の中に留めながらも意識に再現できないことを指すのだと言う。この意味で円了は自分が主張しようとする忘却も「絶対的の失念」を意味するのではなく、「比較的の失念」であるとす。このような疑問に円了が一定の配慮を見せるのも、自らも学んだところの連合主義的な心理学を通じて広がった忘却観と、自著の忘却観にずれがあることを意識したからだろう。が、連合主義的な心理学の忘却観に目配りしつつも、円了はそうした相対的な忘却を忘却術と言い得る理由を次のように説明する。

注意或は意向とは意識の集合せる場合にして或る一点に心力の会注するを云ふ。之を他に転するは即ち其集合点を他の点に移し以て前点の観念をして意識面に浮はらしむるを云ふなり。故に意向を転すると失念するとは其心理作用は固より同一なりと知るへし。設令此二者の間に其別ありて意向を転するは意識の集合点を他に移す

を義とするのみにて、決して失念忘却を云ふにあらずとするも、是れ唯五十歩百歩の相違に過ぎず。故に吾人若し注意の度を漸く減し去らば其結局遂に全然失念するに至るへし。

このように自信を持って、注意による排除と意識からの沈潜を忘却として円了が主張できたのは、同時期にヘルバルト心理学の忘却観が流布していたためだろう。前述のようにサリーは注意と衝動の軋轢を重ねており、リンドネルも注意と観念の葛藤を重ねていた。これらの心理学的言説が円了の発想の源にはあったと思われる。が、サリーやリンドネルが指摘する注意による排除は、特定の対象への意識の集中に伴い、同時に起きる現象だった。これに対して円了はそのような排除を注意の移動により新たに発生させようとする。この点に、江戸時代の忘却観(心の移動が認識の消失をもたらす)に添った、心理学的言説の応用が見て取れる。

このような応用による新たな忘却を提唱する円了だが、連合主義的心理学の忘却観を放棄するわけではない。連合主義的心理学の「幾分忘却」と「全体忘却」との整合性を考えてのことだろう、円了は自らが提唱する忘却を「一部分の忘却」として、これに「全分の忘却」を合わせて「失念」としている。

このような忘却の解釈をふまえて「第四章 失念術の原理」の章では、その原理は三段階にまとめられる。例えば甲を現在の病苦とすると、第一段階として、この病苦をそれとは反対の観念である乙つまり健康に注意を移す。しかしこのままでは対立の連合からいつまた病苦を想起してしまうかもしれない。そこで第二段階として、病苦対健康とは全く無関係の丙の観念に注意を移す。が、この際に注意しなくてはいけないことは、乙を経由して甲から丙へと注意を移しても、丙への注意の移動が甲を忘れるために行われるのだと意識してしまえば、甲と丙の間に関係ができてしまい、丙を思い描くたびに甲を想起してしまう。そのために第三段階として、甲から丙へと至る一連の注意の移動はできる限り意識することなく行わなくてはならない。なかなか難しい。

円了は「第五章 失念術の方法第一」において、このような原理を具体的に実践する主な方法として「感覚的失念術」と「思想的失念術」を挙げている。「感覚的失念術」は「五感或は有機的感覚上に於て吾人の注意を外界の事物に移し以て失念せしむる方法」であり、「視覚的」・「聴覚的」・「触覚的」等に分けられる。「思想的失念術」は「其方法は思想其物の力によりて平素其心に憂慮する所のものに反対せる観念若しくは無関係の観念に意向を転するに在り」。この「思想的失念術」は「想像的」(理想郷の想像等)・「推理的」(理学上

の原理の考察等)・「理外的」(信仰における帰依等)等に分けられる。この中でも円了は信仰上の帰依は世俗社会の一切の不平不満を除くのに効果があることから、最も忘却術として効果があるとする。三つの原理に引き付けて言えば、感覚的忘却術は丙を感覚的な快樂に、思想的忘却術は同じ丙を学問上の知的興味や、帰依による安心感に設定するものと言えるだろう。

これらの感覚的・思想的忘却術が用いられる際の留意点として、どちらにおいても円了は丙となるべき対象を日頃の悩みと全く関係ないものを選ぶこと、その対象は自ら興味を感じるものを選ぶことを挙げている⁶⁸。前述したようにサリーは興味が無意注意を動かすとしていたこと、リンドネルも注意を促すものとして興味が重視していたことを思い出せば、この留意点は苦悩にからみとられた無意注意を操作するための措置と考えられる。

以上が円了が正式的とする忘却術である。他に変式的として、憂慮する問題そのものに注意を向けていく方法が説明されるが、本論の主旨からは外れるので割愛する。

おわりに

このような円了の忘却術は明治 20 年代の後半にあって孤立した試みではなかった。同時期にはいくつかの忘却術も登場している。例えば明治 27 年 7 月には枯木仙士『記憶反面 新奇忘却法』が出版され、明治 28 年 7 月～9 月には宮武外骨「心理応用 忘却法」が『頓智と滑稽』に連載され、明治 28 年 9 月には鶯亭金升「珍発明失念法」が『团团珍聞』に掲載されている。枯木仙士は自らの忘却法を例の「大学」の一節を引きながら「移心の忘却法」と紹介しており⁶⁹、その方法は円了のそれと共通する部分が多い。ここで有賀らが注意を説明する上で同じく「大学」を引いていたことを思い出したい。「大学」の一節の背景には流動する形なきものとして心を捉える前述の考え方がある。とすれば、同時代人にとって円了の忘却術はそれなりに説得力を持つものだったのではないかと思われる。

岩井洋が明らかにしたように、明治 28 年 3 月には和田守菊次郎による記憶術の一大ブームが始まる⁷⁰。これらの忘却術はいずれも記憶術の流行に言及していることから、その登場の理由の一つが記憶術の流行に対する、あるいは具体的にこのブームに対する反発にあったことは間違いない。しかし記憶術は明治 28 年に突如として現れたわけではない。同じく岩井が明らかにしたように、記憶術の出版はすでに明治 10 年代の初期から始まっていた⁷¹。前述のように忘却術の存在は、明治 21 年の『左氏 応用心理学』によりすでに

日本に紹介されていた。にもかかわらず、実際の忘却術の登場を明治 27 年まで待たなくてはいけなかった理由は、和田守記憶術のブームとは別の理由もあったのではないかと思われる。本稿で明らかにしたように、円了が主に学んだ連合主義的な心理学では、忘却の発生は記憶の失敗という、多分に偶発性によるところが大きいものであったために、人工的に忘却を発生させることは困難だった。円了は忘却術を遅くとも明治 26 年末頃から構想し始めていた。そしてその構想はヘルバルト心理学の広まりを待って具体的なものになっていった。つまり、現在の意識からの観念の排除も忘却と位置付け、忘却発生の原理を示したヘルバルト心理学が社会に広がった後だったからこそ、円了は自信を持って自らの忘却術を披露することができたのだと言えよう。岩井はこれらの忘却術の登場の背景に、記憶に対する関心の高まりを見ている⁷²。しかし円了の忘却術に限って言えば、それは記憶に対する関心の高まりとはまた別の、忘却に対する関心があった。

円了の忘却術は他の二つの忘却観と接合したせいで屈折しており、ヘルバルト心理学が生み出した直系の忘却術とは言い難い。これに対して同時期にはヘルバルト心理学直系の忘却術と言って良いものも日本に紹介されていた。

円了の『失念術講義』が出版された二か月後の明治 28 年 10 月にデンマークの哲学者ハラルド・ホフディング(Harald Höffding)の著書が石田新太郎によって翻訳され、『心理学上巻』として出版された。

ホフディングはヘルバルト心理学に依りながらも無批判にこれを継承しているわけではない。例えば、ホフディングは、意識は諸観念の生存競争の舞台であるにとどまらないと主張する。ホフディングによれば、意識の働きが無ければ保持は可能にならない。意識は諸観念に依っているが、諸観念もまた意識の働きかけがあってこそ成り立つのだ⁷³。

批判しながらも、ホフディングは意識を観念の生存競争の場所として捉えるヘルバルト心理学の言説に依ってその忘却術を披露する。

セミストクルスが言へりし如く、実に吾人は記憶するを欲せざる者を記憶し、忘れんと欲する事を忘るゝ能はざるものにして、忘念も亦記憶の如く一技術に相違なし。無関係にして左程要用ならざる者は自ら消散すべしと雖も、大に關係ある観念は、通常観念の不随意運動が他に移転せしめ得ざるが如き著しき経験及び事実と聯結するものとす。

今回のセミストクルスのエピソードの利用にミスマッチは無さそうだ。観念は別の観念の

強い幫助により、意識から消すことが非常に困難である。とすれば、記憶と同じく忘却にも努力と方法が必要であり、忘却のための術が必要なのだ。ホフディングは人工的に忘却を発生させるための方法を提案する。これは「追想の法則」と反対の「忘念の法則」に従っている。ホフディングは忘却術の基本的な法則を次のように言う。

忘念術とは、他の観念もて或る観念を制圧することをいふ。故に若し某事を忘れんとせば、自己の思想を占領する程の強明なる観念の連鎖を探求すべし。其求むる観念の性質(快樂或は懺悔、労働或は空想)は、一に其人の性質及び精神上の原因に基くものなり⁷⁴。

ホフディングの忘却の法則がヘルバルト心理学の忘却観に忠実であることは見やすい。このようなヘルバルト心理学の忘却術を円了の忘却術と対比させると、あらためて際立った違いがあることが分かる。それは忘却を引き起こす原因の違いだ。ホフディングはヘルバルトそのままに諸観念間の生存競争に原因を求める。言わば意識という狭い舞台をめぐる不断の闘いからその忘却は生まれてくる。これに対して、円了は江戸時代の忘却観に基づいている。冒頭の「奮闘哲学」を思い出せば、忘却はつまるところ散-陽の力に起因する。つまり陽の力が保証する不断の流動性から忘却が生まれてくるのだと言えよう。

このような忘却観の違いはその無意識のイメージにも関係している。意識＝手燭という円了のイメージに従えば、意識が移動するに従い無意識の部分も変化する。言わばその無意識は絶え間ない意識の移動がその都度生み出す暫定的な意識の死角でしかない。しかしホフディングのそれは、舞台上の主導権争いの敗者となった観念が復活を狙って身を潜める暗い舞台裏のようである。忘却された観念はこの暗い領域に次々と沈み込む。その無意識はこのような忘却の分厚い層からできているのだ。

円了はこのホフディングの忘却術を知っていたのだろうか？円了の旧蔵洋書中には、このホフディングの著書をロウンズ(Mary E. Lowndes)が英訳した *Outlines of Psychology* がある⁷⁵。この旧蔵書にはアンダーラインや書き込みは見当たらず、円了がこの書を読んでいたのかどうかは分からない。が、同時期にはその翻訳もあったことから興味を抱いた可能性は十分にある。

最後に前述の田中治六が円了の追悼集の中で披露した円了の姿を見て稿を閉じたい。

先生は注意凝聚の力に秀でられしが故に、先生が或事項を専心一意に考へ居らるゝ

時は、側の喧躁なるも妨碍とはならず、又他より先生に話しかくる者あるも一向に聞えざるやうにて受け答へもせらるゝ事なし⁷⁶。

田中治六によればこの状態に陥ると、講義中でもうわの空であったと言う。円了夫人はこの状態の円了を見る度に「例の考へ事が始つた」とぼやいたと言う。まさに「心ここにあらず」の状態である。が、この自らが置かれた現時点の状況に対する認識の欠落は、別事への意識の集中状態でもある。ここで円了の忘却術の原理を思い出せば、円了はまさに忘却の状態にあったと言えるだろう。

家人等の反応から円了はこのような自らの状態に自覚的であったろう。彼の構想した忘却術とは自らの没我状態を一般の人々にも体験できるように理論-方法化してみせたものではなかったか、と言いたくなる。そう考えてみると発表後 20 年も経過してなおこの著作にこだわった理由も分かるような気がする。忘却術が抱える陰陽の往還を思い出せば、円了は没我を経て極度の集中状態にある自らの心の中に、宇宙から分有された陽と陰の靈妙な力を感じ取っていたのかもしれない。

注

- 1 井上円了記念学術センター編『井上円了選集 第 10 巻』(1991 年 3 月 東洋大学)。
- 2 『「エコ・フィロソフィ」研究 別冊』7 号 2013 年 3 月)。
- 3 拙稿「井上円了『失念術講義』考(一)——忘却の「心理経済」的活用——」(『中京大学文学会論叢』4 号 2018 年 3 月)。
- 4 山田慶児『朱子の自然学』(2000 年 11 月第 3 刷 岩波書店) 80~216 頁。
- 5 石田秀実『気 流れる身体』(2003 年 9 月第 11 刷 平河出版社) 106~110 頁。
- 6 三浦國雄『朱子と気と身体』(1997 年 4 月 平凡社) 92~100 頁。
- 7 前掲『気 流れる身体』112~125 頁。
- 8 拙稿「江戸の記憶術と忘却術——青水先生『物覚秘伝』と建部綾足『古今物わすれ』」(『中京大学図書館学紀要』31 号 2010 年 5 月)。
- 9 道教の坐忘法については前掲『朱子と気と身体』222~250 頁参照。
- 10 佐藤将之「井上円了思想における中国哲学の位置」(『井上円了センター年報』21 号 2012 年 9 月)。
- 11 以上、前掲「井上円了『失念術講義』考(一)——忘却の「心理経済」的活用——」。

- ¹² 『奮闘哲学』(『井上円了選集 第2巻』(1987年10月 東洋大学)) 266～268頁。
- ¹³ 以上、稲富栄次郎『ヘルバルトの哲学と教育学』(1972年3月 玉川大学出版部) 54～70頁。
- ¹⁴ F. Ueberweg, *History of Philosophy. From Thales to the Present Time*(New York: Scribner, Armstrong & Co, 1874).
- ¹⁵ 柴田隆行・ライナ・シュルツァ「井上円了『稿録』の日本語訳」(『井上円了センター年報』19号 2010年9月)。 *Ibid.*, p. 268.
- ¹⁶ *Ibid.*, pp. 264-281.
- ¹⁷ 佐藤達哉『通史 日本の心理学』(1997年11月 北大路書房) 15頁、41～63頁。
- ¹⁸ 「妖怪学講義 緒言 総論」(『井上円了選集 第16巻』(1999年3月 東洋大学)187頁)。
- ¹⁹ 東洋大学白山図書館所蔵・請求記号 E140.1: SJ-2。
- ²⁰ 前掲『通史 日本の心理学』29頁。
- ²¹ 同『通史 日本の心理学』57頁。
- ²² 有賀長雄講述『教育適用 心理学』(1885年11月 著作権免許 有賀長雄) 429・430頁。J. Sully, *Outlines of Psychology with Special Reference to the Theory of Education* (London: Longmans, Green, & Co, 1885), pp. 223-224.
- ²³ *Ibid.*, p. 224.
- ²⁴ *Ibid.*, pp.18-39.
- ²⁵ *Ibid.*, p. 73.
- ²⁶ 前掲『教育適用 心理学』223頁。
- ²⁷ 注意の説明に「大学」の一節を用いる例は明治20年代を通じて多く見られる。他にも澤柳政太郎『心理学』(1890年 小林義則) 54頁、渋江保『通俗教育演説』(同年 博文館) 31頁、宮川鉄次郎『心理学』(同年 博文館) 51頁、峰是三郎『中等教育 応用心理学』(1893年 博文館)61頁、広瀬吉弥『教育学』(1894年 文学社) 45頁等がある。
- ²⁸ 前掲『教育適用 心理学』257頁。Sully, *op.cit.*, p. 99.
- ²⁹ 同『教育適用 心理学』257頁。 *Ibid.*, p. 99.
- ³⁰ *Ibid.*, p. 92.
- ³¹ 前掲『教育適用 心理学』249～253頁。 *Ibid.*, pp. 91-93.
- ³² 同『教育適用 心理学』435頁。 *Ibid.*, p. 229.
- ³³ 同『教育適用 心理学』452・453頁。 *Ibid.*, p. 236.
- ³⁴ 和久正辰訳『左氏 応用心理学』(1888年7月 牧野善兵衛)404頁。J. Sully, *The Teacher's*

Handbook of Psychology. On the Basis of "Outlines of Psychology" (London: Longmans, Green, & Co.1886), p. 199.

³⁵ 以上、拙稿「ある抄録者のためらい」(『日本近代文学』101集 2019年11月)。

³⁶ 前掲『左氏 応用心理学』413・414頁。Sully, *The Teacher's Handbook of Psychology*, p. 204.

³⁷ 同『左氏 応用心理学』414・415頁。*Ibid.*, p. 204.

³⁸ Sully, *Outlines of Psychology*, p. 279.

³⁹ 前掲『教育適用 心理学』506頁。

⁴⁰ 興膳宏・木津祐子・齋藤希史訳註『朱子語類』訳注 卷十～十一(2009年6月 汲古書院) 卷十・66条(86・87頁)、卷十一・10条(141～143頁)、17条(150～152頁)。

⁴¹ 前掲『教育適用 心理学』507・508頁。Sully, *Outlines of Psychology*, p. 280.

⁴² 同『教育適用 心理学』508頁。*Ibid.*, p. 281.

⁴³ *Ibid.*, p. 281.

⁴⁴ 前掲『教育適用 心理学』508頁。*Ibid.*, p. 281.

⁴⁵ 同『教育適用 心理学』912・913頁。*Ibid.*, pp. 632-633.

⁴⁶ 同『教育適用 心理学』913頁。*Ibid.*, p. 633.

⁴⁷ 同『教育適用 心理学』913頁。*Ibid.*, pp. 634-635.

⁴⁸ 同『教育適用 心理学』917頁。*Ibid.*, p. 635.

⁴⁹ 山本正身「日本におけるヘルバルト派教育学の導入と展開」(『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要:社会学心理学教育学』25号 1985年)。

⁵⁰ 加藤美代子「我国におけるヘルバルト主義導入の意味」(『教育学雑誌』15号 1981年)。

⁵¹ 今野三郎「明治20年代のヘルバルト主義教育思想——ハウスクネヒト・門下生の著作の検討を中心に——」(『教育学雑誌』17号 1983年)。

⁵² 湯原元一訳補『倫氏 教育学』(1893年5月 金港堂)113頁。G. A. Lindner, *Allgemeine Erziehungslehre* (Leipzig: A. Pichlers Witwe & Sohn, 1890), S. 65-66.

⁵³ 同『倫氏 教育学』115頁。Ebd., S. 67.

⁵⁴ 同『倫氏 教育学』125頁。Ebd., S. 72-73.

⁵⁵ 同『倫氏 教育学』122頁。Ebd., S. 70.

⁵⁶ 同『倫氏 教育学』122頁。Ebd., S. 70.

⁵⁷ 田中治六・三石寅吉訳註『麟氏 実験心理学 上巻』(1894年8月 牧野善兵衛)147頁。G. A. Lindner, *Lehrbuch der empirischen Psychologie als inductiver Wissenschaft. für den Gebrauch an höheren Lehranstalten und zum Selbstunterrichte* (Wien: C. Gerold's Sohn, 1885), S. 63.

- 58 前掲『倫氏 教育学』122・123 頁。Lindner, *Allgemeine Erziehungslehre*, S. 71.
- 59 同『倫氏 教育学』123 頁。Ebd., S. 71.
- 60 国立国会図書館所蔵・請求記号 14-219。
- 61 以上、引用は『哲学館講義録 第六学年度』第 3 号(1892 年 11 月 25 日)。
- 62 前掲『朱子と氣と身体』94 頁。
- 63 以上、引用は『哲学館講義録 第六学年度』第 34 号(1893 年 10 月 5 日)。
- 64 田中治六「井上先生の性格」(『井上円了先生』(1919 年 9 月 東洋大学校友舎)185 頁)。
- 65 東洋大学白山図書館所蔵・請求記号 E140.1:LG-2。
- 66 G. A. Lindner, *Manual of Empirical Psychology as an Inductive Science. A Text-book for High Schools and Colleges* (Boston: D. C. Heath & Company, 1889), p101.
- 67 井上円了『失念術講義』(1895 年 8 月 哲学館) 21 頁。
- 68 以上、引用は同『失念術講義』16~48 頁。
- 69 枯木仙士『記憶反面 新奇忘却法』(1894 年 7 月 山岸利策) 24 頁。
- 70 岩井洋『記憶術のススメ』(1997 年 2 月 青弓社) 11~31 頁、49 頁。
- 71 同『記憶術のススメ』47~78 頁。
- 72 同『記憶術のススメ』49 頁。
- 73 石田新太郎訳『心理学 上巻』(1895 年 10 月 高等学術研究会事務所) 240・241 頁。
- 74 以上、引用は同『心理学 上巻』266・267 頁。
- 75 東洋大学白山図書館所蔵・請求記号 E140.1:HH:1 口。
- 76 前掲「井上先生の性格」184 頁。

【付記】

本稿は井上円了哲学センターの御協力により 2022 年 7 月・同年 10 月に行った円了文庫の調査結果と、2022 年度第 2 回井上円了哲学センター公開研究会(2022 年 12 月 3 日・於東洋大学井上円了哲学センター)での口頭発表とその際に頂戴した数々の御教示に基づいている。記して厚く感謝申し上げたい。なお本研究は、2022 年度中京大学内外研究員制度の助成を受けたものである。資料を引用するに際しては、通行の新漢字・平仮名を用い、私に句読点を補った。

(甘露純規:中京大学文学部教授)